



Johannes Brahms

美しき詩情にあふれる ブラームスの世界

西崎 あゆみ

ブラームスは十九世紀のロマン主義全盛の時代において、古典的な立場で作品を書いたことで知られる作曲家である。管弦楽や室内楽など、オペラを除くあらゆる分野で優れた作品を残しており、演奏される機会も多い。形式性を重んじて曲の構成感を生かし、それにロマン主義的な味わいを反映させる彼の音楽の特徴は、ピアノ曲においても現れている。ブラームスのピアノ曲の創作時期は、はっきり三つに分けることができる。初めに手がけたのはソナタで、一八五二年から一八五三年にかけて相次いで三曲が完成される。しかし、ピアノ・ソナタはこの三曲限りで、ブラームスは二度と作曲することはなかった。続いて取り組んだのが変奏曲で、一八五三年から一八六三年にかけて、「ヘンデルの主題による変奏曲とフーガ」（一八六一年）、「パガニーニの主題による変奏曲」（一八六二〜一八六三年）などの作品が生まれる。しかし、「パガニーニの作曲を最後に、ブラームスは変奏曲というジャンルから永遠に手を引いてしまい、ピアノ用の大曲を再び手がけることはしなかった。ソナタや変奏曲を通してベートーヴェンを超えたいと考えていた、まじめな性格のブラームスの思いがどこかで空回りしてしまったのだろうか？

それから十五年の歳月を経て、ブラームスが世に送り出したのが小曲集である。一八七八年に作曲された八つのピアノ曲（作品七六）を皮切りに、翌年には二つのラプソディ（作品七九）が誕生する。当時はヴァイオリン協奏曲や二つの交響曲といった大作を書き上げ、肩の荷が下りたブラームスの創作意欲が小品の作曲に向かわせたのだろう。そして再び十年あまりの空白の後、一八九二年に作品一六から一九に至る晩年の四つの小品集（計二〇曲）が一気に書き上げられる。親しい友人が次々と亡くなり自らの創作意欲が失われていく中で、作曲家の心情的微々や内面的な世界観が写し出された味わい深い作品が多くなっている。

今回取り上げる六つの小品（作品一一八）や二つのラプソディは、いずれもブラームスが小品の作曲に力を入れていた頃の作品である。六つの小品には、ブラームス晩年の作品に見られる、自らの孤独や諦め、深い悲しみなどを音で表現し、緻密な曲の構成と相まって内省的な作品に仕上げるといった特徴が見られる。二つのラプソディは、標題に似合わない堅固な構成に、若々しい情熱やすこぶる多様な音楽の美しさを秘めた作品である。美しき詩情にあふれるブラームスの音楽をお客様に楽しんで頂けることを願って…。

西崎あゆみ ピアノ リサイタル ～美しき詩情を求めて～

- 日程：2017年7月8日（土）
- 時間：14:00 開演（13:30 開場）
- 会場：東京・銀座・王子ホール
- 料金：全席自由 3,000 円
- ご注文・お問合せ先：
 - 〒116-0002 東京都荒川区荒川 3-74-6-301
 - 一般社団法人 東京国際芸術協会
 - TEL:03-6806-7108 FAX:03-3806-8555
 - <http://www.tiaa-jp.com/>
- プログラム：
 - ベートーヴェン：サリエリの歌劇《ファルスタッフ》より二重唱「まったく同じだわ」の主題による 10 の変奏曲
 - シューベルト：ピアノ・ソナタイ長調 作品 120 D.664
 - ブラームス：6 つの小品 作品 118
 - ブラームス：2 つのラプソディ 作品 79

チケット好評発売中

